門と伝統部門との二重構造とは、交通需要の面でも、交通サービスの供給の面でも色濃く現われている。民間の自由な活動に基づき、ローカルなニーズに対応して発達している「適正技術」としてバラトランジットが大きな役割を果している。

途上国の都市交通問題の解決にあたっては、国全体の開発プロセスの中での位置づけを明確にした上で、民間の活力をできるだけ利用し、限られた資源を有効に使用しなければならない。現状では、社会経済あるいは文化的な背景の下での都市交通問題の理解が不充分であり、先進国の技術や常識の移転には慎重さが求められている。

《主要参考文献》

1 太田勝敏『アジアの都市交通および陸上交通に関する邦文文献目録』一九八一年、東京大学工学部アジア都市研究会

2 山田順一『開発途上国における都市交通特性の分析』一九八二年、東大都市工学科 修士論文

3 Mitsui Consultants, Public Transportation Requirements in Intermediate Sie Cities. 1977.

4 P.J.R.immer and H.W.Dick, "Improving Urban Public transport in Southeast Asian cities : some reflections on the conventional and Unconventional wisdom", Tvansportation Policy and Decision Making, Vol. 1 No. 2/3 (1980)

〈東京大学工学部都市工学科助教授〉

④ 第三世界における都市のはざまで

飯島 茂

一——大都市にみる都市問題
二——近代化がもたらす都市問題の深刻化——カトマンドゥー
三——社会の底辺の〝質的〟な都市問題
四——都市化の波を受ける住民の変化

一——大都市における都市問題

資金的にも、人材の点でも十分に恵まれている先進諸国においてさえ、都市問題の解決はけっして容易なことではない。いわんや、それらの条件を欠いている第三世界の国々において、都市問題がどんなに深刻であるかは、想像にかたくないところである。

たとえば、タイ国の首府バンコクのように、比較的順調に近代化が進んでいるように見える都市でも、近年激増した車公害には、まったくお手上げの形である。排気ガスのために、都心の蚊、蛇、やもりなどが激減したことは、一応棚に上げるとしても、慢性的な交通停滞のひどさは、横浜や東京の比ではない。横浜の旧市街ほどもないタイ国の首府では、バイパスらしいバイパスはおろか、隣の大通りへ抜ける横道も少いために、ラッシュアワーの混雑は言語に絶するものがある。たとえば、町の東端にあるユネスコの地方事務所から西端にあるFAO（国連食糧農業機構）まで、直線距離にしてわずか一〇キロメートルほどなのに、一時間近くもかかってしまう。市当局も、近年、中心部の交差点を立体交差にするなどして、交通停滞解決に努力を重ねているものの、このような〝手直し（パッチ・ワーク）〟的対応では、根本問題解決にはほど遠いのである。しかも先進国とは異り、電車や地下鉄のような公共交通機関が十分に発達していないことも、この問題をさらに深刻化させている。

こうした明確な形で表面化している問題のほかに、あまり目立たないけれども、人々の生活にじわじわと影響をおよぼしている都市問題も無視するわけにはゆかない。たとえば、タイ国政府やバンコク市当局も、乏しい財源を工面しながら、交通事情の緩和に努力している。そのため、近年、急速に新道建設、道幅の拡張が進められているが、そのしわ寄せと思われるものに、バンコクの〝水の

都〃から〃水浸しの都〃への変身がある。海抜ゼロ・メートル地帯にあるバンコク周辺の伝統的交通手段の主要なもののひとつに、舟があった。それは、この地方が、第一にチャオプラヤ川（いわゆるメナム川）を中心とする大小河川に恵まれているからだ。第二は、その低湿地のなかで少しでも高い場所に道路を作る必要から、道の両側に溝を堀り、その土で道路のかさ上げをおこなった関係で、町の中心部でも、大小の水路が縦横に走っていたからである。ところが前述のように、近年、道路整備のために、この種の河川や運河・水路が急速に埋めたてられ、姿を消していった。それと前後して、〃水の都〃バンコクはいつしか〃水浸しの都〃になってしまった。これというのも、バンコク市内の河川、運河・水路が、一年の半分近くにわたる雨期には、調整池として大きな役割を果たしていたからである。この調整池を失ったバンコクが、近年、水浸しになったとしても不思議ではなかろう。とりわけ雨季では、シャム湾が満潮になる前後は、海水がチャプラヤ川に逆流して来るので、その水が廻り廻って、下水の水をも押し上げるからである。これは単に町の中心部を水浸しにするだけではなく、公衆衛生にも問題を投げかけているのではなかろうか。バンコク中心部の高級住宅スクムビットでも、雨季には、ひざ位まで通常水浸しになることは珍しくなく、歩いて行ける距離でも、車の使用を余儀なくされていることが多い。

タイ国と同様、アジアの開発途上国で、比較的順調な発展をしていると思われているインドなどでも、都市問題は年々深刻化の様相を呈している。たとえば、人口の点でインド最大の都市であるカルカッタでは、人口圧力がその限度を越えてから久しい、それでも、二十年ぐらい前までは町の中心部で、貧しい人たちが道路のかたわらで野宿をしているぐらいで、付近の家屋に住んでいる人たちの飲料水に事欠くことはなかった。ところが今日のカルカッタでは、一年のかなりの期間が時間給水になってしまった。湿潤熱帯における水不足は、人々の貧困とあいまって、コレラ、チブス、赤痢と恐ろしい伝染病の多発に連らなっている。

それにしても、東南アジアの〃優等生〃タイ国と、南アジアの〃優等生〃インドの場合には、これまで述べてきたような深刻な都市問題をかかえているとはいっても、それぞれの国の都市の存立が決定的に脅かされているとは思えない。根本的な問題解決は当分無理としても、糾余曲折を経ながらも、今後ともどうにかお茶をにごしてゆく方法を見出してゆくことであろう。

二――近代化がもたらす都市問題の深刻化―カトマンドゥー

ところが、国連の分類でも、〃もっとも開発の遅れている国〃とされているネパールの首府カトマンドゥーになると、都市問題の深刻さはわれわれの想像を絶するものがある。

中世的雰囲気をたたえたこのヒマラヤ王国の首都も、二〇年ほど前までは、近代都市の持つ便利さには欠如していたものの、その古めかしく、落着いたたたずまいは、威厳に満ち、旅人の心をとらえずにはおかなかった。ところが、ここ数年の町の変化は、いったいなんということなのだろう。ジェット機が発着できる新空港が整備され、近代的ホテルも新築され、一見近代化が進んだように見えよう。だが、都市自体の構造的基盤（インフラストラクチャー）は一向に変ろうとしない。いや、それのみか、都市人口の急激な増加を考えると、町の状態はむしろ年ごとに悪化の方向にあるのではないかと思う。〃シビル・ミニマム〃は目に見えて低下しているといえよう。

わたくしは仕事のため、ここ数年間、毎年のように、カトマンドゥーを訪れる機会があるけれども、生活環境の急激な変化には、いささか目を覆いたくなるのである。たとえば、町のごみ処理問題ひとつをとっても、すでに限界を越えているのである。かつては、たいへんに魅力的なこの古都も、今日では裏道はごみの山に埋っている。このため、それをあさるカラスと、それに群るハエの数には、外国からの観光客もいささか驚き、当惑するのである。

それにも増して、カトマンドゥー市における都市問題を深刻に考えさせられたのは、ほとんど慢性化した停電である。それも事故などによる一時的な現象ではなく、都市に対する人口集中に最近電力需要が追いつかないからである。とりわけ、十月後半から翌年三月頃、この国の渇水期と観光シーズンのピークが重なる頃の電力事情は、極度に悪化する。王宮や政府関係の建物以外、カトマンドゥーの町は、いくつかのブロックに分けられ、交代で一日平均二～三時間、外国人観光客が多数流入するクリスマス・新年のハイシーズンには、時には数時間もの停電が続くのである。しかも、当地の一流ホテルのほとんどが、暖房を電熱に頼っているのだから、たまったものではない。亜熱帯とはいえ、海抜一、三〇〇メートルほどある冬の夜は寒いからである。

それでも、首府のカトマンドゥーの電力事情は、まだましなほうである。そこから西へ約二百キロメートルほどの所に

あるネパール第二の都市ポコラになると、人口集中と観光化に対する電力需要が完全に追いつかなくなり、一九八一年の例だと、電気の供給がよくて隔日、へたをすると二〜三日に一度になっていた。

観光客にとって、〝キャンドル・サービス〟が素敵に思えるのは、最初の一晩と、クリスマス・イブだけである。資源といえば、ヒマラヤという観光資源に限られているこの王国では、電力不足は、単なる都市問題というだけではなく、観光収入の基盤をも揺がし、国の経済の存立にさえ影響を与えるのではないだろうか。わたくしのようなネパールのオールド・ファンにとっては、人事ながら気にかかるのである。

三――社会の底辺の〝質的〟な都市問題

こうした〝量的〟な問題のほかに、社会の底辺では、〝質的〟といえるような都市問題が発足していることも注目する必要があろう。

世界の大部分の国々は、いわゆる多民族国家であって、巨視的に見ると日本のように〝一民族、一言語、一文化〟という国のほうが例外なのである。とりわけ、国家統合が未熟で、国民形成も進んでいない第三世界においては、この傾向はきわめて顕著であるといえよう。わたくしが、これまで述べてきたネパールもその例外ではなく、〝一民族、一言語、一文化〟の現実とはおよそほど遠いものである。北海道の二倍ほどの国土も、その八十数パーセントは山岳地帯で、そこに東京都に近い人口が住んでいる。この千二百〜三百万人の人口も、大摑みにいっても、十指に余る民族集団に分かれている。さらに、方言が通じる程度にまで分類の単位を縮少すると、民族集団の数が倍増してしまう。

もちろん、このヒマラヤ王国の人たちも、ネパール社会の分裂的傾向を傍観しているわけではない。異民族集団間でも、ミート（疑制兄弟）とかミートニー（擬制姉妹）制度などを創出して、その傾向に歯止めをかけようとしている。ミートとか、ミートニー関係を持つと、たとえ異民族集団間の者でも、当人たちに兄弟姉妹同様の権利義務の関係が生まれるだけではなく、かれらの子供たちさえをも拘束するほどの関係になるのである。当人たちはもちろんのこと、かれらの子供たちもあたかも近親の者のように通婚ができなくなるだけではない。それと同様に、日常生活において助け合うことが期待されるのである。

また、この国の国教であるヒンドゥー教や、さらに仏教のような組織宗教（高等宗教）も、異る文化、異る価値観の溝を埋め、ネパール社会の分裂的傾向にブレーキをかけている。ミートやミートニーの制度が、異る文化や異る価値観を個人もしくは家族のレベルで、その溝を埋めようとしているのに対し、ヒンドゥー教や仏教は、それと同時に異民族集団間の溝を埋めようとしているのであろう。このあたりに、ネパールの人たちの積年の英知を感じないわけにはゆかない。

しかしながら、このような民衆の英知も、多数の人たちが鼻を付き合せて生活し、政治的にも経済的にも利害が対立しがちな現代の都市の〝異常〟な情況のもとにおいては、伝統的な機能を十分に発揮しているとはいえない。いや、機能が十分に発揮されていないのではなく、都市化や〝近代化〟の波の中では、その伝統的機能が限界を越えているのかも知れない。その意味では、ネパールの情況は、同じ山がちな国土であっても、便利な海上交通のおかげで、ある種の文化的統合が萬葉時代から進んでいた日本列島の住民の〝一枚岩〟的な社会とは、基本的に異っている。とりわけ、カトマンドゥーの場合には、歴史的にも、きわめて特異な性格を持っているので、町の性格も複雑である。記録に現われているだけでも、町があるカトマンドゥー盆地に、ネワール族がマッラ王朝を築いたのが西暦十二世紀で、その後、約六世紀にわたってこのあたりには〝ネワール族の国〟があったのだ。しかも、かれは絢爛たる文明を築いたのであった。ところが、一七六八〜九年に、インド平原に起源を持つタクール・カーストがカトマンドゥー盆地を征服し、現在のグルカ王朝をおこし、ネワル族は〝異民族〟の支配するところとなる。このような歴史過程は、カトマンドゥーの都市的性格に、きわめて微妙な影をおとしたのであった。

とりわけ、爛熟した都市文明を誇るネワール族が、西ネパールの山岳地帯出身の〝新参〟の征服者たちの政治的支配に、唯唯諾諾として、盲従するわけはなかったのである。ネワール族の態度は、外部からの侵入者に対する漢民族の対応にやや似ているのであった。マッラ王朝の滅亡からすでに二世紀近くたった今日においても、ネワール族は基本的にそのような態度を変えてはいないようである。ネワール族は現在でも、カトマンドゥーが〝自分たちの町だ〟ということを信じて疑っていない。従って、中央政府の公布する政令や法律に対しても、自分たちのコミュニティーにおける慣行とか慣習法ほどに重さを置いていないような節がある。これでは、なかなか近代都市というものは成り立たないと思う。たとえば、町の中心部にあるネワール族の

居住地区などを歩いていると、常に頭の上に細心の注意をしなければならない。それというのは、人々が天衣無縫二階、三階の窓から、ごみや汚水を平気で道に向って放り出すからである。

また、この町の交通ルールの無政府状態も深刻である。これはなにもネワール族だけの責任ではないとは思うけれども、その状態には外国人観光客も、目を見張るのである。しかも、それが前にいったようなカトマンドーゥの歴史的性格と無関係ではないと主張する現地の人たちがいるから、問題は複雑になる。

一九八一年の春、カトマンドゥーに滞在した時のことであった。ある日、〃支配者〃たちの末端に属する友人のドライブで、町中を車で走っていると、例により、ヒンドゥー教徒が聖なるものとする牛たちや町の人たちが傍若無人に車の前に飛び出して来る。いつもは〃ゆっくり、ゆっくり〃主義のこの友人も、次第にいらつきはじめ、最後にネワール族の若者が車の前に飛び出した時などは、外国人のわたくしのいるのも忘れ、「ネワールのやつらは、この町をまだ自分たちのものだと思っていやがる…」と、はいて捨てるような調子でいっていたのが、やけに印象的であった。この言葉は一見平和そうに見えるこのヒマラヤ王国における民族間の溝の深さと、カトマンドゥーの都市的性格の複雑さを、思い知らせてくれたのである。

第三世界の都市問題と、これまでのように都市の倫理にたって一瞥しただけでも、解決の容易ではない問題が山積していることが分るであろう。

四――都市化の波を受ける住民の変化

それでは、都市化の波を受ける、住民の立場から、都市問題を眺めた場合には、いったいどのような問題が、発生しているのであろうか。その一面を少し覗いてみることにしよう。

よく知られているように第三世界においては、コミュニケーション・システムの未発達から、都市と村落の文化的断絶は、一般的に先進諸国におけるよりも、かなり大きいといえよう。そのため、都市化にともなう住民の文化的衝撃は、計り知れないものがある。

これについて、ネパールでは、きわめて珍しい好例があるので、紹介することにしよう。

それは、中部ネパールきっての商業民族タカリー族の例である。かれらは、ネパール・ヒマラヤの八、〇〇〇メートルの巨峯ドーラギリとアンナプルナの谷間タコーラ地方を故郷に持っている。かれらは、昔から、北方のチベット方面へネパール南部やインド方面から入手した農産物や軽工業製品を売り、それと引き換えに、チベット方面からは南方向けの岩塩や牧畜生産物を輸入して生計をたてていた、中部ネパール第一の商業民族であった。このヒマラヤ貿易は、前だれがけにもみ手といった〃たおやめぶり〃のものではなく、銃を背に、ヤク（チベット牛）やら馬のキャラバンをひきいて、チベット高原を行く姿は、西部劇の世界を思わせるものがあり、きわめて〃おのこやぶり〃のものがあった。かつて、かれらはヒマラヤのこの地方を、名実ともに席捲をしていたのである。

タカリー族の商業活動は、まさに一家・一族の総力戦型であった。男が長期のキャラバンに出ている留守の間は、女たちが家を守り、南北から来る商人たちと丁々発止と渡り合っていた。子供たちとても同様であった。六～七歳になると、もういっぱしに家に来た客へ酒食の運搬をしたり、水汲みや牧童として働かされていた。わたくしが、一九五八年にタコーラ地方を初めて訪れた時には、タカリー族のコミュニティー全体が発散する熱気には、いささかたじろかされた記憶がなまなましい。

ところが、一九六九年のチベット事件により、中華人民共和国がヒマラヤの国境を閉鎖し、また、多数のチベット難民が流入すると、ヒマラヤ北部地方は経済的に決定的な打撃を受け、社会的混乱も極致に達した。活動的で、決断に富んだタカリー族は、座して死を待つようなことはなかった。タカリー族の主力は、次第に南方移住をおこない、新天地に新しく運命を切り開こうとしたのである。今日では、カトマンドゥーをはじめ、ポコラ、ハイラワといったネパール南部の都市で、タカリー族は意欲的に商業活動に従事している。一九八一年には、首府カトマンドゥー在住のタカリー族だけでも九十数名を数えた。

ネパール南部の都市において、タカリー族はあまり政治的、経済的基盤を持っていなかったために、南方へ多数移住をした直後には、経済の面で危機に直面した。一部の有産階級を除いては、その日の生活にも事欠く者も少くなかったという。しかしながら、ヒマラヤ地方やチベット高原のきびしい自然環境や社会環境にはぐくまれ、鍛えられ、したたかな生きざまを身につけていたタカリー族にとって、都市で生計を立てるのは、そんなにむずかしいことではなかった。勤勉さと商才により、奇跡的な民族の再生をおこなったのである。わずか十数年のうちに、何人かのタカリー商人は、カトマンドゥーでも有数な新興勢力として、経済

界に頭角を現わし始めたといわれる。

もともと教育熱心なタカリー族の多くがいっそうの富を得るとともに、都市へ移住したことによって、一流校が身近になったのだからたまらない。かれらは財の許す限り、いや、時にはその限度を越える場合でも子弟たちとカトマンドゥー近くのミッショナリー系の全寮制の一流校へ、小学校の頃から入学させ始める。その背景には、かれらが中部ネパールで、名実ともに多数民族（マジョリティ）であった地位から、カトマンドゥーなどの都市で、少数民族（マイノリティ）になってしまった精神的な不安定感があったことも事実である。それに、タカリー族の多くが、富を蓄えてみて分ったことは、金であがなえないものに、地位と名誉があったからであろう。そのため、子弟の教育に、異常なまでもの情熱をかけたとしても、不思議ではない。

その教育投資のおかげで、高等教育を受けた世代の何人かは、医者、技術者、学者といったテクノクラートとして活躍し始めたのである。

このように述べてくると、都市文化の影響を受けたタカリー族の都市生活に対する適応は、すべてが順調であり、生活も以前より向上し、まったく問題がないように思えるだろう。だが、都市化の過程における伏兵は、むしろタカリー族の家族やコミュニティーの中にあったのである。その第一は、高等教育の普及による世代間の断絶の拡大である。英語で教育を受け、学校の寮では日常生活も英語の子供たちが、母語のタカリー語も、国語のネパール語も、十分に身についていないからである。そのため、ヒマラヤ地方で、正規の学校教育を受ける機会の少なかった両親や年配の人たちとのコミュニケーションが、次第に困難になってくる。

それよりも重大な問題は、若きタカリー族の価値観の急速な変化であろう。ごく最近も、タカリー族の若きテクノクラートの筆になる手紙が一通わたしのもとに舞い込んだ。それによると、かれの奥さんの義弟が日本からの招待で研修に行くので、その妻（奥さんの妹）を同行させたいというのだ。ついては、彼女のため宿舎と、夫が研修中に何か稽古事を探して欲しいというのである。そこまではよいのだが、行間には、その両方とも無料が望ましいこと、それにできればネパール人は外貨が持ち出せないので、滞在費も心配して欲しいというのである。

このように〝おんぶにだっこ式〟に甘えた手紙や依頼は、わたくしの二十余年にわたるタカリー族との交際の中で、これまで一度たりとも受け取ったことはなかった。そこには、銃を背に馬をかって、ヒマラヤの高い峠を越え、ある時は高山病に苦しみ、またある時は盗賊たちと銃撃をまじえながら、荒涼たるチベット高原にキャラバンをした大商業民族の骨太な生きざまや、誇り高い自尊心の片鱗すらうかがうことができなかった。ただあるのは、都市というぬるま湯に顎まで浸りきった青白きインテリの甘えとひ弱さばかりが目に立ち、昔からのタカリー・ファンであるわたくしを、ひどく悲しませたのである。

これまで、第三世界における都市問題をいろいろな角度から眺めてきたが、その根本はどうやら、資金や資材の不足とか、計画の不備といったような〝量的〟な問題だけではないようである。むしろ、もっと大切なことは、この文の最後の方で述べたタカリー族のケースのように、人々の心の内部にこそ都市問題の本質があり、それが第三世界における国家の将来とも、深く関わりあっているように思えてならない。もって他山の石としたいと思う。

〈東京外国語大学教授〉